
魂送のサラリーマン

桜咲ジュン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魂送のサラリーマン

【Nコード】

N0763X

【作者名】

桜咲ジュン

【あらすじ】

睦月むつき 耀あきらはどこにでもいるサラリーマン。

・・・の、はずだった。

ある日突然の衝撃をきっかけに動き出した運命の歯車。

平凡な人生が一転し、睦月を待ち受ける運命とは・・・

仕事に恋愛、更に学園生活!!?!

今、1人のサラリーマンの非日常が始まる。

リストラ・・・それは突然に。

「ああ・・・今日も疲れたなあ。」

睦月むつき 耀あきらは仕事を終え、田んぼしか見えない帰路の途中で小さな溜息を漏らした。

この青年、睦月 耀は身長175cm体重65kg、好きな物はリングで嫌いな物は特に無し、趣味特技も特に無く、いたって平凡な、平凡すぎるサラリーマンである。

睦月は高卒で仕事に就き、今や二年目社員となる。

仕事場の環境には慣れたものの仕事は思う様に進まず、体力的にも精神的にも苦しい状態で日々を過していた。

（毎日終電。明日も終電だろうなあ・・・。）

夜空一面を優しく彩る星を見ながら、少しでも自分の明日も輝いて欲しいと空を眺める。

そんな時だった。

ズドォーン！！！！

大きな爆音と共に、一瞬光に包まれた睦月。

「う、うあああー！！！！！！」

直後、睦月の体には凄まじい衝撃が走る。

体に電撃が走るとはまさにこういう時に使うのだろう、痛みと痺れが同時に来て頭がボーっとしてくる。

・・・ああ、なんだか全てがどうでもよくなってきた・・・。

・・・

「・・・う、うう。」

——いけない、いけない、危うく意識を持っていかれるところだった。

こんな所で死ぬのは嫌だし、死ななかったにしてもこんな所で倒れてしまったらたぶん朝まで起きられず、明日は確実に遅刻だろう。そんなのは絶対嫌だ、先輩や上司に何を言われるかわかったものじゃない。・・・にしても、

「い、今のはいったい・・・？」

少しふらつきながら周りを見渡すが何もない——いや、田んぼと山としか見えない。

もしやと思って空を見上げるが、夜空が見えるだけで雲など欠片も見えなかった。

（雷・・・？ いや、雲もないのに雷に撃たれるのはおかしい・・・よな？）

睦月は、唐突に訪れた衝撃が一体何処からやってきたのか疑問を抱いたが、その答えはいくら考えたところで見つかりそうになかった。

（・・・体が重たい。今の衝撃が何だったのかよくわからないけど、明日も仕事だ。早く帰って寝よう。）

今にも倒れてしまいそうな足取りでゆっくりと自分の住むアパートを目指す睦月。

その後なんとかアパートにたどり着くと、すぐに深い眠りへとついた。

——今日襲った衝撃が彼の人生を大きく変えていた事も知らずに。

次の日。

睦月は普通に出勤し、デスクワークをしながら昨日の事を考えていた。

カタカタカタ・・・（昨日の衝撃はやっぱり疲れがきたのかなー・・・？それとも・・・）

答えが出ないまま、昨日仕上げられなかった自分の仕事を黙々ノルマとこなす。

そんな時、後ろから声がした。

「えー、睦月君・・・ちょっと私の部屋まで来なさい。」

「・・・は、ハイ。」

上司だ。急に呼び出してどうしたのだろう？

疑問を抱きながら上司の部屋にノックして入る。

上司の部屋は、なぜか空気が重く張詰めている気がした。

「実はだね・・・。」

上司が自分に椅子に座ったまま睦月を見る。

なぜか哀れみの目を向けられている気がする。

「言い難い事なんだが・・・今日の昼をもって君は・・・クビ、だそうだ。」

まさかのリストラ宣告だった。

「・・・え？・・・ええ!!?」

「上からの御達しでね、私にもなぜ君がクビなのか訳がわからないのだよ。」

訳がわからないのはこっちだ。なんだ？僕の上司は新手の冗談ジョークを言うようになったのか？と、睦月は苦笑いをした。

「はは・・・冗談・・・ですよね？」

「すまない・・・冗談ではないのだよ。」

「そ、そんな・・・」

余りにいきなりな事態に戸惑う睦月。

体に流れる血がサーッと引いていくのがわかり、手からはネトツとした嫌な汗が染み出てくる。

信じたくない真実を突き付けられているのに、反論の言葉すら出てこない。

「本当に申し訳ない。・・・なんだ、その、あまりにも急な事でいろいろ大変になると思うが、頑張れよ。・・・以上だ。」

こうして、何も反論ができないまま上司の部屋を出た睦月。

自分の机に戻り、未だ状況が飲み込めないままボーッと片付けを始めた。

周りの人達はそれぞれ自分の仕事に集中していたので誰からも何も聞かれることなく午前中が終わり、

睦月は、

――――^{クレ}解雇となった。

(・・・明日からどうしよう)

これからと思われていたサラリーマン生活が一瞬にして終わりを迎えたのだ。

今からどうしていいかなど検討できる訳もなく只、途方に暮れるしかなかった。

睦月は燦々と照らす太陽の下、スーツ姿でトボトボと自宅であるアパートへと向かった。

帰り道、昨日衝撃を受けた場所辺りに差し掛かると、睦月は突然ポ

ン、ポンと肩を叩かれた。
何かと思って振り返るとそこには、

——見覚えの無い女性がいた。

身長170cm位で黒いレディーススーツを着ている女性が、見ていると今にも吸い込まれてしまいそうな真っ黒い髪をなびかせながら立っている。

彼女は僕と目が合うとニコリと笑った。

「君が睦月 耀君ね？」

「・・・ええ。そうですが何か？」

「私は、^{ヒノ}緋野 ^{シヤクヤ}灼夜。呼び方は・・・そうね、みんなには灼夜さんと呼ばれてるから、灼夜さんでいいわ。」

「はぁ・・・。」

人差し指を頬に当て少し悩んだ仕草をしたりしながら、急に自己紹介をしてきた彼女。

なぜこの綺麗な女性は、僕の名前を知っていて、僕に自己紹介をしているのだろうか？と睦月が考えていると、彼女は驚くべき事を聞いてきた。

「で・・・本題ね。君は今日会社をクビになった、違う？」

「!!？」

もう一度言うがこの女性、緋野灼夜と名乗る女性に面識はない。

なのになぜ、彼女は僕の事を知っていて今日あったばかりの事実^{リストラ}を知っているのだろうか？会社の人間か？

いや、会社にこんな人がいた記憶は・・・

と睦月が考えていると、彼女は小さく笑った。

「睦月君、不景氣真っ只中のこんな時代に放り出されてこれからどうするつもり？再就職するにしても就職難で簡単に就職もできないでしょう？」

「どうするもこうするも突然リストラ宣告をされたので、考えなど有る訳がない。」

「いえ・・・まだなにも・・・。」

「でしようね、けど、そんなあなたに良い話があるわ。睦月君・・・うちの会社で働いてみない？」

「!？・・・え？本当ですか!？」

「嘘なんてつかないわ、本当よ。じゃあとりあえず、私に連いて来て。会社説明や手続きしたいから、会社まで案内するわ。」

「・・・はい！わかり・・・（ん？ちよつと待てよ?）」

ここで睦月は気がついた。あまりにタイミングが良すぎる。

本人ですら今日知った事実リストラをなぜ彼女は知っているのだろうか？しかも、他社の人間でありながら。

都合の良すぎる再就職の話を持ち出してくる彼女は、いったい何が目的でどこで情報を手に入れたのだろうか？

そう考えると、彼女にすんなり連いて行く事は危険じゃないのか？連いて行つて本当に大丈夫なのだろうか？と思えてくる・・・。

等と睦月が考えていると、緋野は面倒くさそうに頭を掻いた。

「・・・そう、君も面倒な人ね。しよがないわね・・・計画とは違うけど私流にやるとしましうか、ねっ!!!」

—————ゴッ!!!———

鈍い音が響く。

睦月の顔には、先程まで正面にいた緋野の膝がクリーンヒットしており、睦月は崩れ落ちる様に

——静かに倒れた。

・・・それはまさに一瞬の出来事だった。

話を終えるか終えないかのタイミングで攻撃。

避ける暇など有るわけがない。

睦月はモロに緋野の跳び膝蹴りを顔面に喰らい、訳も分からず気絶した・・・。

だが、睦月もただやられていた訳ではなかった。
強打を喰らった刹那、確かに見ていた。

緋野の足の間から覗く赤色をした水玉模様を。

（あ、見えた・・・）

その直後、睦月は意識を無くした・・・。

リストラ・・・それは突然に。(後書き)

作者が初めて書く小説です。

一生懸命書きましたので、よかったら続きも見てください。

|(・ω・)| |オネガイシマスデス

会社はTHC。

目が覚めると、睦月はソファアの上に寝ていた。

起き上がらずに目で辺りを見渡すと、部屋には黒いビジネスソファと机がなく、壁には古い賞状や写真等が飾られてる。

全く見知らぬ部屋・・・いくら思い返しても、この部屋に入った記憶などなかった。

「ここは、一体・・・？」

「お、目が覚めたのか！一体いつまで寝てるのかと思ったよ。」
急に後ろから女性の声がした。

後ろを向くと、そこには身長160cm位のいかにも活発そうな明るい茶髪の女性がいた。彼女は女性なのに、なぜだか男性物の黒いスーツを着ている。

そして、その後ろには身長178cm位と背は高めで、茶髪がかった長髪を後ろで結んでいるスーツ姿の男性が笑顔を立っていた。

「なあお前、灼夜さんの跳び膝蹴りをモロ食らったんだって？痛かっただろー？あの人は手加減を知らないからなー。俺も去年は（もご！？もごもご）」

近づいてきたと思ったら色々と喋りだす短髪の女性。

あまりの勢いに睦月が気押されていると、それを見かねてか、後ろの男性が近づいてきて女性の口を覆った。

「こら夢斗^{ムト}、いきなり喋り過ぎだ。新人君は困っているじゃないか。言いたい事は色々有ると思うが、まずは自己紹介するのが礼儀じゃないかな？・・・で、睦月君だったかな？まずは初めましてだね。僕は姫島^{ヒメジマ} 飛鳥^{アスカ}。気軽に姫島さんと呼んでくれればいいよ、よろしくね。」

「・・・はあ・・・」

よくわからないが、この営業スマイルの得意そうな姫島さんは空気の読める人だという事だけはわかった。

「（もご） つぶはあ！で、俺は夢斗だ。お前の大先輩になる。しっかり敬えよ！・・・ってか俺の事は女扱いするなよ、こんな姿だが俺は一応おと（もご！？またかよ！？もごモゴ）」

「だから、一気に喋り過ぎだって。いきなりこんな所に連れてこられて混乱しているはずなのに、そんな一気に喋られても更に混乱するだけだろう？・・・違うかい、睦月君？」

「・・・え、ええ、そうですね・・・ここはどこなんですか？」

「モゴもご（俺にも喋らせろー！）」

睦月は、姫島の前で口をおさえられてモゴモゴ言いながら暴れている夢斗という女性をよそ目に、とりあえず質問をした。

「ここは『T H C』と呼ばれる会社内だ。君を失神させた灼夜さんや僕や夢斗こいつが働いてる所だよ。」

「・・・失神させて僕を此処に連れ込んだってことですか。」

「モゴモゴ（早くはーなーせー！）」

「不本意ながらそういう事になるね。とりあえずその事については、これから会う部長が説明してくれると思うよ。・・・あー、もう、うっかしいな。」

コキッ！

姫島が暴れている夢斗の首を軽くひねると、異様な音とともに夢斗は静かになり、倒れた。

「・・・ふう。あ、コイツはこういう事には慣れてる奴だから気にしないで。じゃ、ついて来て。」

そう言って姫島と名乗る男はドアを開け、歩き出した。

遅れて睦月も倒れている夢斗を避け、姫島さんに連いて部屋を出る。

「今さっき灼夜さんに説教を終えたばかりのはずだから、部長は部長室にいるはずさ。・・・さあ着いた。」

先ほど居た部屋を出て、通路を突き当たりまで歩くと部長室だった。コンコンとノックして姫島さんは「部長、入ります。」とドアを開ける。

ドアを開けると、その部屋はいかにも部長室！という間取りの部屋だった。

二つの対になったソファ、その真ん中に低い机、奥にはガラス張りの壁を背に部長の机があり、そこに部長と思しきお爺さんが座っている。

しかしお爺さんは取込中の様で、電話をしている最中だった。

お爺さんはこちらに気づくと、電話機を押さえ小声で言った。

「おお睦月君、目覚めていたのか。少し待っていてくれ、直に終わる。」

「・・・」

「ええ、ではまた色々分かり次第連絡させていただきます。・・・

ええ、ではまた後日、失礼します。」

——カシャン。

電話は無事終わった様だ。

電話を終えたとお爺さんははこちらにゆっくり歩いて来ながら

「・・・急に連れて来てしまつてすまないね。とりあえず座ってくれたまえ。」

と、睦月に座ることを勧めた。

小柄で白髪、おでこが広く眼鏡を掛けている60代位のお歳であるお爺さん。

やはりこのお爺さんが部長の様だ。

睦月が言われるままソファーに腰掛けると姫島は部長さんに、「今のはやっぱり社長ですか？」と質問した。

姫島の予想は当たったらしく「うむ。昨日飲み過ぎたらしく、二日酔いだから後日にくれと言われてしまったよ」と苦笑いした。それを聞き姫島は「フッ、社長もお酒が好きですね。」と笑いながら答え、「では、失礼します。」と部長室から出て行った。

「えー、まず私はT H C、日本支部特別連行営業部の部長の風切だ。まずは睦月君に謝罪を言わなければならぬ。うちの灼夜が君に暴力を働いたと聞いている。本当に申し訳なかった。彼女には私からよおーく言っておいたから許してほしい。」

「・・・はあ。別に良いですけど・・・。（あれも・・・見えたし・・・。）」

睦月はその時の事を思い出し少し赤面した。

風切部長はそれを見て少し首を傾げたが、気にせず話を続けた。

「ちなみに彼女が言っていたスカウトの話は本当だ。私は君にこの会社で働いてほしいと考えている。その理由を話す前に、こちらからも質問をさせてほしい。君は先日、突然衝撃に襲われはしなかったかい？」

「衝撃？・・・確かに昨日すごい衝撃を感じましたね。」

「その衝撃、こちらの調べではキミに雷が直撃したのが原因だと思われる。しかしそこで疑問が生まれる。なぜ直撃したら死んでしまう様な物を喰らっても君が生きているのだろうか？」

「・・・？」

「信じられないとは思うがこの世界には、認知されていない『力』が存在する。その力は、時に魔力や霊力、浄化力等とも呼ばれ、様々な種類がある。この力には、数ある種類の中に少し例外も存在す

るが、君の住む世界では殆どの者が持っていない事がわかっている。つまり、極一部の者しか力を宿していないと言う事だ。力を持つ者は、生まれた時から力を持って生まれ『覚醒』、つまりは使える様になる時期は人により様々となっている。生まれながら力が使える者もいれば何かのきっかけで使える様になる者もいるという事だ。例えば・・・、雷の直撃を受けるとかな。」

「・・・その『覚醒』のおかげで僕は今生きているという事ですか？」

「そういう事だ。」

余りにぶっ飛んだ話だったが、睦月はとりあえず話を最後まで聞いてみる事にした。

「・・・すごいお話ですね。」

「余りに突拍子過ぎて理解に苦しむのも無理はない。とりあえず話を続けると、『覚醒』が行われると力が使えするという良い事だけが起る訳ではない。力の大きさに耐え切れずおかしくなる者や、力が制御できず暴走する者もいる。なのでそうならない様に保護し、力の正しい使い方を教え、力を使える場所を提供する場所こそ、この会社『THC』なのだ。君にはその宿った力を活かし、この会社の為に働いて欲しいと思ったので、灼夜に君をスカウトをしてきてもらった。」

「・・・なるほど、流れだけは理解できました。」

「あまり現実味のない話ではあるが、就職先のない君には良い話はずだ。とりあえず此处で働いてみて自分に合わなかったり、嫌だと感じれば辞表一枚で辞めてもらって結構だ。どうだろう？この契約書にサインをしてみないか？」

そう言って風切部長は机に置いてあった契約書を睦月の前に出した。しかし、「はい、わかりました。」と二言返事が出る訳もなく、睦月は悩んだ。

「先ほども言ったがこの会社で働けるのは力を持った者のみだ。しかもこの会社で働けるチャンスは今しかなく、今回を逃すと多分この会社で働く機会はもう二度と訪れない。そしてその場合、自分で自分に宿った力を制御しなければならぬ。それができないと回りの者を傷つけてしまったり、君自身にも死の危険が出てくる。そうならないためにも、どうか今ここでサインをしてほしい。」

「・・・（うーん）。」

睦月は困りきっていた。

別に再就職したくない訳ではない。しかし、本当に信じていいのか悩んでいた。

強制的に連れて来られたのだから戸惑うのは当然の反応である。

睦月が契約書を前に考え込んでいると、急に部長室のドアが勢いよく開いた。

バンッ！！！！

「失礼します部長！！先程巡回中に、地上をうろついているD級霊を発見しましたので睦月君を連れてきます！！」

開くやいなや走ってきたのは跳膝蹴りをした女性、緋野灼夜だった。緋野は天地の手をつかむと、グッと引っ張り睦月を立ち上がらせた。

「ええっ！！！！？？」

「じゃっ行くわよ！私の手を離さないでね。」

焦る睦月の手を握り何かしようとする緋野。その姿を見て部長もびっくりしていた。

「お、おい、待て灼夜！その子はまだ契約が済んでな」

部長の話など聞こうともせず緋野は「せーのっ」と手を強く握った。その瞬間、目の前の景色はぐると回り、気がつけば睦月は外に立っていた。

灼夜さんの仕事。

涼しい風。聞こえる川の音。

閉じた目を開け辺りを見渡すが、そこは紛れもなく外だった。

（あれ？今さっきまで、T H Cの部長室って所にいたはずなのに、どうなってるんだ？）

知らない河原。人の姿は見えない。

時間はもう夕方になっていた様で、色が変わった太陽が辺りを優しくオレンジ色に照らしている。

「ここは・・・？」

「ここは貴方の住んでる世界のとある河原よ。今のは会社からただ飛んできただけ。」

右から声がした。右を見ると、緋野がしゃがみこんで靴を履いていた。

「やっぱり仕事ってのは早めに覚えた方が得でしょ。だからね、今回君を連れてきたの。」

「仕事を覚えるって僕はまだ・・・」

「無駄口は聞きたくないわ、ほら、靴履いて。」

「・・・（えー。）」

「あ、後、呼び方は灼夜さんで良いって言ったでしょ。もちろんナレーションもよ。」

「？」

緋・・・（ゲフンゲフン）灼夜さんは全く聞く耳を持つとうとしない。

しょうがなく靴を受け取り、靴を履く睦月。

「さて、まずは昼の事を謝らなくちゃね。ごめんなさい・・・簡単な説明だけしてスカウトしてこいって言われてたんだけど、その説明ってのが苦手だね。前やった時も説明が上手くいかなくて面倒くさい事になったもんだからつい・・・蹴っちゃったわ。」

立ち上がり、少ししょんぼりしながら話す灼夜さん。

そりゃあ、いきなり力や魔力とか言われても、ワケがわからずに信じる事なんてできないだろうなあ。

睦月は灼夜さんに同情し、優しさを込めて返事をした。

「・・・大丈夫ですよ。もう気にしてないですから。」

「・・・あら、そう。なら本題に戻って、ここら辺にいた霊を探す
としましょうか。」

あら、そう。って反応軽っ!?

灼夜さんの軽い反応に驚く睦月。しかしもっと驚くべき所は違う所
であるとすぐに気がついた。

「・・・霊?」

聞き間違いかと思った。霊?・・・幽霊とかの事を言っているのか?

「ん、部長に聞いてないの? 私達の仕事はこの世界で死んだ人達の
魂を地獄に送る事よ?」

「え? ——地獄?」

「そう地獄。あ、睦月君、このバッチを持ってて、持ってるだけで
効果はあるから。」

軽い口調でサラッとすごい事を言い、灼夜さんは黄色いニコちゃん
マークのようなバッチを睦月に投げた。

キャッチしてよく見てみると、○×の目をしたそのバッチは、ギザ
ギザの歯でニツコリと笑っている。

・・・パチ物か?

「そのバッチは便利よー。うちの科学者が作った超万能ツールでね、
私達の能力や私達自身を自由に一般人から見えなくなったり、さっき
やったみたいに登録地点に瞬間的飛んだり出来るのもそれのおかげ
なんだから。」

「あ、そうなんですかー・・・って流さないで下さい灼夜さん! 地
獄に送るってどういう事ですか?」

「私達は死んだ人の魂を地獄に送るのが仕事なのよ? 送って当然じ
ゃない。」

そう言ってスタスタと歩く灼夜さん。本当に霊を探しているのかキヨロキヨロしている。

「地獄に送る仕事？それってどういう事」

「あ、見つけたわ。」

睦月の話など聞こうともしない灼夜さんは何かを見つけ、止まった。視線の先には1人の男性が歩いている。

ヨタヨタと力なく歩くその男性は、ブツブツ言いながら何か持って歩いている。

じっと目を凝らすと何を持っているのかわかった。バットだ。

なぜ河原でバットを持って歩いているのかわからないが、よく見るとバットもその人自体も半透明な事に気がついた。

「睦月君はここで見てて、霊を地獄に送るってのがどういうものなのか教えてあげるから。」

灼夜さんはそう言ってタタツと走り、その男に近寄っていく。

「私は貴方を送る使者として来ました。手荒な事はしたくありません。どうか素直に私の指示に従ってください。・・・まずはこうやって穏便に済ませる事を勧めるの。」

灼夜さんはそう言って半透明な男性に交渉を始め、睦月に地獄への送り方を説明し始めた。

しかし、交渉の方は一瞬の内に終わった。

「ギがああアああ！！！！」

振り返るやいなや、男は奇声と共にバットを振りかざしたのだ。

灼夜さんはその攻撃をひらりとかわし、

「ハッ！！！！」と言う声とともに、ハイキックを繰出し男性を吹き飛ばした。

「ウがあアあ！！！！？」ドガッガッ、ガンッゴロゴロ・・・

河原の凸凹な石に顔をぶつけながら激しく吹き飛ぶ半透明な男性。

「交渉決裂ですね。では強行手段をとります。・・・一応こうやって交渉が終わった事を告げるの。あ、あと、相手は霊なので今の様な通常攻撃ではダメージを殆ど与えられないわ。と、言う事で・・・」

そう言って灼夜さんは右手を前に出す。

その瞬間右手の掌の先に、火の玉状の炎が「ボッ」という音をたてて現れた。

掌の先で激しく燃える炎は火の粉を散し、飛び散る火の粉は舞い上がり灼夜さんの黒髪を更に際立たせている。

「こういった能力を使った攻撃で相手を弱らせるの。・・・いいかしら睦月君？一瞬で終らすからしっかり見ててよね。」

この時、睦月はただ口を開けるしかなかった。

「・・・え？」

あんぐりと口を開けたまま灼夜さんの後方で、掌の先に出てきた炎がどうやって出てきたのか？これからどうなるのか？

現状がよくわからないまま、ただ見ているしかなかった。

しかし半透明な男性は睦月とは違い、炎が出ている事を気にする様子もなく、再び奇声とともに突っ込んで行く。

「うがあうああああ！！！！」

それを見て灼夜さんは少し笑いながら、

「では、燃え散りなさい。」

と言い放ち、その瞬間、右手の掌の先にあった炎は半透明な男に向かって勢いよく吹き出した。

掌から溢れ出す様に出てくる炎は、ゴォッ！という轟音と共に進み、一瞬で男は炎に包まれた。

「うぎああ・・・」

苦しむ様にもかく男は、燃えだしてから5秒程するとバタリと倒れて動かなくなった。

炎が消え黒焦げ状態になった男性は、まさに虫の息だった。

灼夜さんは黒焦げとなった男に歩み寄ると、「（・・・ちよつとやりすぎたかなー。）」と小言を言い、札を取りだして貼り付けた。すると男は少し時間が経つとスッと姿を消した。

「これで転送完了つと。・・・で、どうだった睦月君？これがこれから君が行う仕事なんだけど、面白そうだとは思わなかった？」

「・・・（ポカーン）」

「あれ？」

睦月は完璧に固まっていた。

灼夜さんが近づき、ツンツンと突付いたりもしたが、それでも睦月は硬直したままだった。

ふう・・・とため息をつき、灼夜さんは呆れた。

睦月の決意と暴走の灼夜さん。

「全く・・・しょうがないわね、ほらっ！」ゲシッ！！

「イタッ！！」

灼夜さんのローキックが睦月に当たった。軽いノリなのに強い蹴りだ・・・非常に痛い。

「で、見た感想はどうだったの？」

「・・・何というか・・・まだ信じられないです。今のが全て現実だなんて。」

「信じられないでしょう？けど、全て現実よ。現世に漂っている霊をああやって地獄へと送る、それが仕事よ。まあ・・・私達の部所はちょっと特殊だけど。」

話の途中、急に一陣の風が吹いた。

風は意外と強く、睦月は少し目を細め、灼夜さんの長い黒髪がなびく。

ザアア・・・と、オレンジ色に照らされた木々が静かにざわめいた。風によって生まれた沈黙。風が吹き抜けると、聞こえるのは川のせせらぎだけとなった。

灼夜さんが髪を整えていると、睦月は気になっていた事を聞いた。

「僕にもああ言った能力が？」

「有るわ。有ったから、有る事が分かっているからこそ、私が直々に君を会社に入れるようスカウトを命じられたのよ。感謝しなさい。」

そう言って胸を張る灼夜さん。

いや、今の話だと灼夜さんに感謝するのではなく、スカウトを命じた人に感謝するべきなのでは？

何にしても、やっぱり灼夜さんはなにか勘違いしているようだ。とりあえず・・・伝えておこう。

「・・・僕はまだ入社すると決めていませんが？」

「・・・え！？嘘！？・・・なんで！？部長から入って欲しいって言われて、すぐにサインしたんじゃないの！？」

灼夜さんはキョトンとしている。

「入る事に悩んではいましたが、サインが書けなかったのは灼夜さんが連れ出してしまったからですよ？」

「え、そうだったの！？（しまったー・・・後でまた部長に怒られるなこりゃ。）・・・あれ？けど、何を悩んでいたの？」

「・・・そりゃあ色々と。」

「・・・睦月君、あなた馬鹿じゃない？無職のあなたが会社からスカウトされて躊躇う理由が何処にあるの？どんな会社だろうがとりあえず入ってみて、嫌だったりしたら、次の就職先が決まるまで続ければ良いだけの話じゃない？わざわざ無職を選択する理由がどこにあるの？」

「それは・・・。」

「それは？」

睦月は正論を言われ、反論ができない。

「・・・そう言われてみれば確かにそうだ。よく考えればすぐ分かる事なのに何故気が付かなかったのだろう？まだ仕事内容がよくわからないが、それはどの会社に入っても一緒。会社から誘われて断る理由なんて、僕には何もないじゃないか。」

「そうですね・・・決めました！僕はこの会社で働かせて頂きます！」

「それでヨシッ！！・・・じゃ、ここでの仕事も済んだし、会社に帰ろっか！」

行きとは違い、灼夜さんはタタツと走ってきて睦月の手を握り、「

せーのっ」も無しに跳んだ。

またも目の前の景色がぐるりと回る。

気がつくと、睦月は部屋の一角に立っていた。どうやらT H Cのオフィスのようだ。

目の前には風切部長や姫島、夢斗が立っている。

三人がこちらに気づくと、部長が顔を真っ赤にさせ、灼夜さんは顔を青白くさせた。

「紗・紅・夜・君？私はいつも、人の話は聞けど、何度も何度も言っではいなかったかね？ん？どうだね？」

「わ！部長！ちょ・・・ストップ！ストップ！ちゃんと睦月君の説得をしておきましたからっ！！！」

「む・・・そうか、なら良い。睦月君、ここにサインを頼む。」

部長切り替え早いな！！？身を引きながら固まっている灼夜さんを余所目に、風切部長はクリップボードに挟んだ紙を睦月に差し出した。そして睦月は戸惑う事無くサインをし、風切部長はサインが書かれている事を確認した。

「うむ・・・ではすまないが、ここにいるみんなに改めて挨拶を頼む。全員もう会っているとは思うが一応な。」

「ハイ！では・・・改めまして、睦月 祐です！今日から宜しくお願いします！！」

パチパチパチ・・・

風切部長、姫島、夢斗が拍手をする。遅れて灼夜さんも硬直から立ち直り、拍手し始めた。

「あ、そういえば夢斗、あんたもしかして冷蔵庫に有った私のプリン食べなかった？」

拍手が終わると、思い出した様に灼夜さんが夢斗に質問をした。

「え・・・し、知らないですよ？」

「あー、確かに夢斗が食べてましたよ。」「（あ、おい！？飛鳥っ！！）・・・ゲ。」

慌てて知らない振りをした夢斗だが、すぐ姫島に嘘だとバラされた。その瞬間、睦月の横にいた灼夜さんが真っ黒いオーラに包まれた。隣にただでわかる・・・怖い。

夢斗の顔は、青白くなっている。そして、灼夜さんと一定の距離をとる様にゆっくり後退りをした。

「事故、事故だったんですよ・・・。腹が減ってる時に冷蔵庫の中を覗いたらプリンが有ったもんだからっ、つい・・・。」

「へえー・・・夢斗。つい、で私のプリン食べちゃったんだあーー。」

「す、すみませんっっ！！！！後で灼夜さんのだと知ったんですっ！！」

「じゃあ、あんたは私に始めに言った言葉が嘘だと自分で認めるってわけね、夢う斗おお？私に嘘つくなんていい度胸じゃない？・・・さあーって、今日はどんな服にお着替えがいいかしらあ？メイド？それともセーラー服う？フ・・・フッフッフ・・・」

怪しげに笑いだす灼夜さん。先ほどまでと違い、顔が笑って見えるのは気のせいだろうか？

そして、な・・・なぜだろう？灼夜さんを包んでいるオーラが更に凶悪的な黒に変わっている気がした。

ひ、非常に怖い・・・いや、怖いというよりも、なぜだろう・・・悪寒がする。

睦月はそう思いながら夢斗の方を見た。夢斗の顔からは滝のように汗が噴出している。

「そ、それはもう嫌だあああ！！！！」「あ、こら！待ちなさい！」

「ふう・・・やれやれ。」

ダッ！と耐え切れずに逃げ出す夢斗。

それを追いかける灼夜さん。

それを見て溜め息をつき、部屋を出ていく風切部長。

睦月は灼夜さんが離れた事で悪寒がしなくなり、一安心した。

夢斗と灼夜さんがオフィスの中を騒がしく追い回していると、姫島が睦月に近づいてきた。

「そういえば、初めて灼夜さんに会った日。・・・あれ、見たんだろ？」

答えはすぐに思い付いた。・・・答えづらい。

「君、嘘が下手だね。顔に書いてあるよ。僕は見ましたって。」
ギクッ！！

一瞬でバレた。

「なぜ・・・その事を？」

「そりゃ、知ってるさ。そういう風になる様、僕が仕込んだんだから。いつも男物のスーツを着ている灼夜さんを口説き落とすのは凄く大変だったんだよ。で、何色だった？」

笑って質問をする姫島。睦月は直感的に、この人に嘘は通用しない事を悟った。

しょうがなく、恥ずかしさを堪え素直に答えた。

「あ・・・赤色の水玉模様でした・・・。」

「ヘエー・・・赤色の水玉かぁ。プフッ・・・赤が好きな灼夜さんっぽいけど、ちょっと子供っぽすぎる気がするなぁ。・・・そうは思わない？」

「・・・ええ、まあ・・・。」

「フフッ・・・だよ。わかった、ありがとうね睦月君。」

姫島は、吹き出したり、笑みを浮かべたりした後、お礼を告げて睦月から離れていった。

何を言われるのか恐れていた睦月は、その瞬間少しホットとした。しかし安堵した直後、姫島はとんでもない事を叫んだ。

「灼夜さん！！睦月君が蹴りを喰らった直後に見えた赤色の水玉模様の今日のパンツは灼夜さんには子供っぽすぎるんじゃないですかー？って言ってますよー！！」

「ちょっ！？姫島さんっ！！？」

睦月の叫びは虚しく、夢斗を追い詰めて机の上に立っている灼夜さんの動きが止まった。そして同時に夢斗が吹き出した。

「んなっっ！！？」

「・・・赤色の水玉模様・・・お子様・・・ぷっ！」

灼夜さんは顔を真っ赤にさせ、ゆっくりと睦月の方を向いた。

「・・・ふう、やっぱりあの時見えてたのね……。見えない位のスピードで気絶させれば良いと思ってた私が甘かったわ……。けど、だからって、言い触らさなくても良いんじゃない睦月くん？貴方にもお仕置が必要みたいねえ？・・・貴方には何が似合うかしらあ？意外とチャイナとか似合うかもねえ・・・フフフ・・・」

その瞬間、睦月をまたも強烈な悪寒が襲う。

「ヒィィッ！！」

夢斗は灼夜さんが睦月の方を向いた隙に睦月側、ドアの方へと走っていた。

「灼夜さん！ヨダレ！ヨダレが出てますよ！？」

そう言いながらドアの開けようとする夢斗。

しかしドアは開かない。

「あっ開かないっ！！あ！？飛鳥っ！コノヤロー！！」

ドアの反対側では、一足先にオフィスを出た姫島がドアにもたれ掛かって、ドアが開かない様になっていた。

クククッ・・・とドアの向こうから、堪えきれずに出た姫島の笑い声が聞こえる。

ガチャガチャガチャ・・・

夢斗が必死にドアタブを回すが、一向に開く気配がない。

「むーとお・・・あんたさつき笑ったでしょう？絶・対・に逃がさないからね。フフ・・・」

灼夜さんが夢斗に死刑宣告をした。

夢斗は灼夜さんの方を向き、睦月に小さな声で言った。

「（マジで・・・ヤバイ）」

ゴクリッ・・・。

睦月は息を呑む。

「フフ・・・フフ・・・ハァーッハッハッハァーッ！！！！可愛く撮ってあげるから覚悟なさい！！！」

笑いながら灼夜さんが飛んできた！

不意を突かれた特攻に、睦月と夢斗は心臓が止まりそうなくらい驚き、叫ぶ！

「キ、キタァァー！！？逃げろおお！！！！」「うわあああ！！！！」

全力で逃げ出す夢斗と睦月。

それを不気味に笑いながら追いかける灼夜さん。

こうして睦月は特別連行営業部、略称「特連部」の一員となり、昨日までとは違う新たなサラリーマンとしての日々が始めたのだった。

目覚めと出勤。

チュン・・・チュン・・・

「・・・ん？・・・朝か。」

鳥のさえずりで睦月は目を覚ました。

少し目がショボショボしているが、天井が見える。

その天井はいつも見ている天井とはまた違う天井だった。

（・・・知らない天井・・・か。）

睦月は、どこかで聞いた事のあるフレーズなどと、微笑した。

そして寝たままもう一度目を閉じ、ボーッとした頭で昨日の事を振り返る。

昨日は色々あった・・・。

急に会社をクビになったり、帰り道で強打を喰らって気を失ったり
THCと呼ばれる会社で働くことになったり、強制的にコスプレさせられたり。

・・・コスプレはひどかったなあ・・・。

その時初めて夢斗さんが女性ではなく男性だと知って・・・夢斗さんめっちゃ恥ずかしがってたなあ。

けど夢斗さんにコスプレはわかるが（見た目的に）、俺にコスプレはないだろう。

しかし灼夜さんは「あんた・・・意外と綺麗でイけるわね。」と変な目で見てくるし・・・。

本当に最悪だった・・・。

しかもその後と言われたのが、なんと引越終了のお知らせ。

僕が今まで住んでいたアパートから、この会社の指定しているアパートへの引越しが僕の知らない間に行われていて、しかも手続きや作業はすべて終わっているという状況。手回し良過ぎだよ・・・。

・・・

あれ？　そういえば今日はどうすれば良いんだっけ？

たしか昨日帰り際に風切部長が明日は灼夜さんを迎えに行かせるとか言ってたような・・・？

んー・・・確か灼夜さんは7時に来るって言ってた様な気がしたな・・・。

睦月は寝ぼけながら、とりあえず時間を確認しようと右手を布団の中から出そうとした。

ベット横の机上には、目覚まし時計が置いておいたはず。

しかし睦月の手は、布団から出る直前に不思議な感触の物に触れた。

(！？　これは・・・なんだ？　なんかサラッとしている・・・？)
とても細いそのサラッとした物は、非常に柔らかく、そして長かった。

(ん？　こんな物あったっけ？)

更に右手を出そうとすると指先が何かに当たった。手探りでその物を確かめる。

(・・・？　丸くて・・・柔らかい？)

服みたいな硬い布地の「それ」は、揉むと非常に柔らかだった。が、睦月にはそれが何なのかさっぱりわからない。

「ん・・・」

！？

・・・気のせいかな音がした気がした。・・・いや、聞き間違いでなければ人の声だった気がする。

睦月は、まだショボショボしている目を左手で擦り、自分の横に何があるのか見ようとした。

！！？

・・・驚いた。

布団が・・・僕の隣が大きく膨らんでいる・・・？・・・なぜ！？

睦月はすぐに身を起こし、バツと布団を捲った。

!!!!?

なんと隣には灼夜さんが寝ていた。男物のスーツを着て、小さな体を更に丸めて寝ている。

「・・・んん・・・寒い。」

睦月は啞然とした。

何故、灼夜さんはここ（自分の部屋の中）にいるのか？

部屋には鍵が掛けてあった筈だし、っていうかそもそも何故同じ布団の中に寝ているのか？

しかも男物のスーツ姿で。

・・・そういえばさっき右手が揉んでしまった柔らかい物って・・・？

睦月は恐る恐る右手が触れた場所を探した。

睦月が起き上がる前、寝転がった状態で右手を伸ばそうとしたら触れてしまう場所。

（まさか・・・いや、そんな・・・漫画じゃあるまいしそんな都合よく触れてしまう訳が・・・）

睦月の予想は当たり、漫画の様に都合よくその場所を触れてしまう現実がそこにはあった。

（うわー・・・これは・・・。今は寝てるからバレないにしても、バレたら殺されそうな事実だな。）

寝ていた場所から推測してみても、右手を伸ばす位置に丁度灼夜さんの胸がある。

灼夜さんの髪は長いので胸の位置まで髪が届いていた。（始めに触ったのはこれかあ。）

胸を揉んでしまった事実に驚きながら、自分の右手を開いたり握ったりした。

まだ手には、柔らかな感覚が残っている。

感傷に浸っていると灼夜さんが目を覚ました。

「ん……？あ、睦月君……おはよ……？」

灼夜さんは目をこすりながらゆっくりと起き上がる。睦月は、とりあえず少し身を引किながら聞いた。

「……灼夜さん？……なんで僕のベットのの中にいるんですか？」すると灼夜さんは眠たそうに頭をポリポリ掻きながら言った。寝起きという事もありあり、灼夜さんの黒髪は少しボサボサになっている。

「んー……？それはアンタを起こしに来たからに決まってんじゃない……。」

（起こしに来た？……今何時だ？）

睦月はとりあえず時間を確認した。時計の針はまだ6時を指している。

「……あれ？確か昨日は7時に来るって言ってませんでしたっけ？」

「ああー……そう言ったかも知れないわね。けど……今日はなんだか早く目が覚めてしまって……もう一度寝るのもなんだし、暇だったから睦月君を起こしに来たってわけ。」

……暇だったから来たってスゴイ理由だな。

「……此処に来た理由はわかりました。……で、起こしに来た灼夜さんはなぜ僕のベットに潜り込んでいたのですか？」

「いやー、起こしに来たんだけど睦月君があまりには気持ちよさそうに寝ていたもんでー……つい一緒に寝ちゃった（てへっ）。」そう言って舌を出す灼夜さん。この人……お茶目だな。

「はは……そうでしたか。（気持ちよく寝ていたからって理由で布団に入ってくる人を初めて見た気がする。）まあなんにしても……よっ、と！」

灼夜さんのボケ？を苦笑いで誤魔化し、睦月はベットの上で立ち上がった。

「とりあえず出勤出来る様準備しますので、すみませんが少し待って下さい。」「わかったわ。」

そう言うとき睦月はベットを降り、手洗い場で着替えを済ませた。そして部屋の中にくつもおいてあるダンボールの中からフライパンなどの道具を取り出した。（昨日ダンボールの中身は確認しておいた。）

「そういえば、灼夜さんは朝飯は食べられたんですか？」

「・・・あ、食べてないわ。私の分までお願いできるかしら？」

「はい、わかりました。」

ということで、睦月はスクランブルエッグ等の簡単な食事を作った。

「・・・ボソッ（私より上手じゃない）」

「え？何か言いました？」

「な、なんでもないわっ。意外と料理上手なのね。」

「いえいえ。去年から一人暮らしでしたからちよっと料理ができるようになっただけですよ。」

「・・・（一年でこんなにも？私なんてまだろくに料理もできないのに。）」

「どうかしました？」

「なんでもないわっ。」

等と会話をしアパートを出た。

ちなみに睦月は、スクランブルエッグを作っただけで料理が上手いと褒められたのは初めてだった。

（そんな特別な事したかなあ・・・）

通勤電車の中で、何故褒められたのか？首を傾げる睦月であった。

新しいアパートから会社《THC》までは、1時間半程で着く。

市街地から少し離れているこのアパートから駅まで徒歩で向かい、電車に長い事揺られ、電車から降りるとまた少し歩く。

この通勤経路はかなり人が多い為、僕は灼夜さんと少ししか会話できなかった。

それにこれだけでは普通の通勤風景にしか想像できなさそうなのこの通勤経路には、・・・普通の景色など全く見えなかった。

電車の中では、座席で女性物スーツを来たスタイリッシュ？な猫（身長は普通の猫並み）が

「昨日食べた高級牛タンがビールに最高に合うんだって。あんたも今度食べてみニャよ。」

「モー……。わ……。わかりましたー。……。今度食べてみますー。」

と、隣に座ってる牛の顔を持つ男と会話していたり（共食いじゃないか？）、一つ目があるボロイ傘が普通に座席に座っていたり……。とにかくおかしい光景だった。

それと言うのもこの世界が今まで住んでいた世界とは、違う異世界だからである。

普通に住んでいた世界が在^{ザイセ}世（アライブワールド）と呼ばれ、この世界は境^{キョウセ}世（バウンダリーワールド）と区別されており、確か……。生と死の境界にある世界らしい。

この世界自体は在^{コトワリ}世となんら変わり無い風景が広がっているのだが、住んでる者や理^{コトワリ}が違おうらしく、人間だけでなく妖怪や妖精等も住んでいる、との事。

とりあえず……。そんなよく分からない世界に引っ越してきた俺だが、無事灼夜さんと共にTHCに辿り着いた。

THCは、本当に大きな会社で用地が広い。ここは本社ではなく日本支社らしいが、支社でこの大きさなら本社はどのくらいの大きさ

なのだろう？

広い用地にそびえ立つ10階建てのビル、他にも色々建物はあがあるが、
なんと言っても隣にある

———幼・小・中・高・大一貫の大きな学園が俄然目を引く。（
大学は希望制らしい）

なんでも、会社の福利厚生として設置されたらしいが・・・やりすぎじゃないか・・・？

社員の子供だけでなく一般の人も入れる様になっているらしいが、
一般で入る場合の試験は厳しいらしく、生徒数の少ない学園となっ
ている様だ。（もちろんそれなりに生徒数はいるらしいし、受ける
人自体は多いとの事）

この様な用地となっているので、会社前は幼児を連れたパパさんや
小学生や中学生、高校生に大学生が沢山いる。

（電車内とはまた違ったカオスな光景だ。）

「ほら、ボーっとしてない。さっさと行くわよ。」

「はい。」

そんな光景を余所目に僕と灼夜さんはTHC内に入り、エレベータ
ーに乗り込んだ。

境世学園。

人だかりの中エレベーターに乗り込んだ睦月達だったが、朝のエレベーターは人でぎゅうぎゅう詰めだった。だが、階を重ねていくにつれて少しずつ減っていき、やっと少人数になったと思ったところで特連部の有る7階に着いた。

静かに動いていたエレベーターがチーン！という音を立てて止まり、ドアが開く。

「（やっと着いた・・・）」

朝の人混みに揉まれたので睦月は疲れた顔をした。

「ここら、もう疲れたの？ だらしないわねー。まだ始まってもないわよ。毎日来るんだから早く馴れて頂戴ね。」

「はーい。頑張ります・・・。」

灼夜さんがエレベーターを出て正面・事務室の扉を開けようとする
と、左の方から音がした。

ガチャツ。

「・・・」

「・・・はーい、分かり次第報告しますねえー。」

どうやら左手、奥にある部屋（部長室）から誰か出てきたらしい。
左手を向くと、一人の女性がドアの前に立っていた。ドアを閉めて
いる所だったのでこちらには気が付いていない様だ。

その女性は灼夜さんと同じくらいの背丈（170くらい）で、セミ
ロングな髪は灼夜さんよりも少し茶色がかった黒色をしており、茶
色のズボンに白色の胸元が見えてるゆるいシャツ、その上に黒いコ
ート型の黒衣を羽織っている。

ドアノブに手をかけていた灼夜さんがその女性に話しかける。

「お、メグじゃん。今日はどーしたの？」

女性はこちらに気が付き、こちらに歩いてくる。アダ名で呼んでい

るところを見ると、どうやら親しい仲のようだ。

「あ、しゃく、ちよつとした野暮用だよ。にしても久しぶりだねえ。前お願いした『能力霊体化』は試してくれてるうー？」

ゆつくりとした口調。その口調だけで、ぼわぼわとした独自の空気を持っている事が伺える。

睦月は話の内容を理解できなかった。

が、話の内容よりも異常に揺れる胸元に気をとられていた。

睦月が目線の置場に困っていると、そんな事をよそに灼夜さんは女性の方に歩いていき、話を続ける。

「うーん、あれねえ……。使ってはいるのだけど、たまに隠れきれずに見えてる時もあるみたい。やっぱ能力使う時は、今まで通り鏡使ってた方が楽かな、見つかる心配もしなくて良いし。」

「そっかあ。やっぱ能力を見えなくするのは難しいねえ。……。うん、わかったあ！また作り直しておくから、今まで通り鏡の中で戦闘をたのむよお。」

この時、睦月は話など聞いておらず、ひたすらに目線を奪われる胸元から目を背けようとしていた。

「（うわーすごい胸……。近づいてる時から胸がすごく揺れてる気がしてたけど、これは……。目のやり場に困る……。）」

灼夜さんの胸が普通くらいだとしたら特盛級であろうその胸。背けようとする気持ちも空しく、結局睦月の視線は胸元に奪われていた。

「ところでさあ、しゃくー。君の隣で私の胸と君の胸を見比べてるこの子は……。誰え？」

そう言われて睦月が気がついた時には、黒衣の女性が睦月の方をジト目で見ていた。

「なっちょっ睦月君っ！何、見比べてんのよっ！」

「いや、見てませんっ！僕は胸を見比べてなんかいまガッ！」ド

ガッ!!!

灼夜さんは顔を真っ赤にして胸を押さえると、間髪いれず蹴りを繰り出し睦月の顎を強打し、一回転して着地した。

「わぁー、サマーソルトキックが綺麗に決まったねえー。」

横では黒衣の女性が無邪気に技に見とれて、手を合わせて喜ぶ。

「痛っっっ。」

睦月は顎を抑えてしゃがみ込み、痛みで唸った。

「メグのは異常に発達しすぎてるんだから比べるんじゃないの！私だってこれでもCカップはあるんだから。」

腕で胸を隠し、顔を真っ赤にさせたまま灼夜さんがとんでもない事を言う。へえー・・・Cなんだ。

「発達しすぎねえ・・・。開発じゃー、とか言っただけの胸を揉みまくったのはどこの誰だかねえ？」

「うっさいっ！！あの頃はここまで差が出るとは思ってなかったの！！」

笑いながら横を向く黒衣の女性に対し、灼夜さんが赤い顔を更に赤くして怒る。

「あ・・・あのー、でその方は誰なんですか？」

「え、あ、あー・・・そういえば紹介がまだだったわね。彼女は私の幼なじみで、メグ・・・じゃなかった、統野^{トウノ} 恵^{メグミ}。いつもこんな感じでふわふわしてるから、抜けてそうないメージになりがちだけどTHCの科学者をやってるのよ。この前渡したバッジとかは彼女が作ったの。で、メグ、この子が昨日からうちの部に入った睦月^{ムツキ}カケル 耀君よ。」

「へえー、この子が例の・・・。耀君だっけえ、宜しくねえ。」

「（例の？）・・・よろしく願います。」

睦月が戸惑いながら挨拶をしていると、後ろでエレベーターの到着音が鳴った。

チーン！

遅れて聞いた事のある声が睦月の後ろから聞こえてきた。

「あ、灼夜さん、おはようございます、耀もおはよう……あ、恵さんも、おはようございます。」

睦月が後ろを向くと、そこには夢斗が立っていた。

「おはようー夢斗君。じゃあしゃく、私はそろそろ戻るねえ。」

「ん、そうね、じゃまた今度ゆっくり話でもしましょ。」

そう言って灼夜さんに手を振り、エレベーターに乗り込む統野。

「じゃあねえ夢斗君、耀君。」

「どうも。」「ええ、また今度新しい発明品とか教えてくださいねー。」

「はいはい。」

統野が後ろを向いたまま手をひらひらさせたところでドアが閉まった。

灼夜さんと夢斗と睦月はそれを見届けると、順に事務室に入っていた。

「さて、じゃ、私はこれから色々やらなきゃいけないから……夢斗、あんた今日は講義に行くんでしょ？ 睦月君も一緒に連れてって色々教えてあげて。」

灼夜さんは荷物を置くと小さく背伸びしながらそう告げた。

「はい分かりましたー。じゃ耀、荷物置いたら早速移動すんぞ。」

「はい、夢斗さん。……ちなみにどこに行くんですか？」

「あー、隣に建ってる学園に行くんだよ。この会社の給料システムは在世に存在するシステムとは少し違って、在世に行って営業（死んだ人の魂を地獄に送る事）をして割増賃金を貰う事もできるんだが、能力向上して、それを会社に認めてもらう事で基本給を上げる事もできるシステムになってるんだ。だから異能者は営業ばかりでなく、講義に行って能力向上の訓練や勉強、試験を行うんだよ。あ、ちなみに普通の会社と同じように知識向上でも給料は上がるから、講義に来る人は全員異能者って訳じゃないけどな。」

「へえー・・・そんなシステムになってたんですか。」

「わかったか？それじゃ、行くぞ。」

「ハイ。」

夢斗と睦月はカバンをそれぞれの机の上に置き、事務室を出た。そして、エレベーターに乗り1階の渡り廊下で繋がっている学園へと向った。

エレベーター内は乗る時と比べ人が少なかった。

「そういえば、昨日の夜は良く眠れたか？」

エレベーターの奥の壁にもたれ掛かって夢斗が言う。

「コスプレの記憶が悪夢の様に襲ってきましたが・・・何とか眠れましたよ。」

「昨日のコスプレな・・・アレはマジで最低だったな。逃げ回ってたら最後は能力使って飛んでくるし・・・あの趣味はどうにかしてほしいと思うぜ。」

夢斗さんの顔が瞬間暗くなる。・・・相当に嫌だったんだろうな。

そんな話をしているとエレベーターは1階に到着した。睦月は道が分からないので夢斗に付いて歩いていく。

「そういえば、昨日来たばかりだけどこの世界については分からない事は無くなったか？」

「いえ、まだ分からない事だらけですね。けど、昨日『THCのススメ』境界の悪魔ガイドブック』って本を貰って読んだので、この世界や会社については少し知識を得る事ができましたよ。分厚い本だったんで全部は読みきれませんが。」

「ふーん・・・勉強熱心だな。」

そういえばこの話は灼夜さんにもしたな。灼夜さんは『THCのススメ』境界の悪魔ガイドブック』って物が存在してる事に驚いてたっけ。

「いえ、そんな事ないですよ。そういえばTHCってTake Hell's companyの略称だったんですね。直訳して『地獄

を取る会社』って事でとればいいんですかね？」

「いや、意味としては『地獄に送る会社』らしい。うちの社長が、今は会社名は英語が主流だ！って言い出して、『地獄に送る会社』を勝手に英訳して『THC』って言葉に決めたらしい。Take Hell's Companyを直訳すると『地獄を取る会社』にもなるけど、一応『地獄に送る会社』に取れなくもないって事で、半ば社長のゴリ押しでこの会社名に決まったんだとさ。」

「へえー。そうなんですかー・・・。」

「因みに前までの会社名は『境世地獄会社』だったらしい。」「そのまんまじゃないですか!？」

「ははっ、そうだな。」

そんな会話続けているといつの間にか渡り廊下を歩き終え、学園内に入っていた。

「この学校は『境世学園』って言ってな。幼稚園から大学まで全てを取り揃えている大学校で、10年前に戦争が終わった記念・・・というか、仲直りの証みたいな意味を込められて作られた学校なんだぜ。」

学校の廊下を歩きながら両手を大げさに伸ばして夢斗が言う。

「戦争？どんな戦争があったんですか？」

「お、それについてはまだ知らなかったか。この世界に存在する大企業『苦患地獄会社』と『極楽天国会社』の戦争さ。ちなみに名前は、境世地獄会社がTHCに変わった様に、極楽天国会社もParadise's sender Company、略称PSCに変わっているぞ。この2つの大企業はこの世界の中枢とも言える企業だから、戦争時は物凄い数の人達が辛い思いや被害にあったんだぜ。」

「へえー、知らなかった。」

夢斗と睦月はそんな会話をしながら階段を上った。

目指す教室は校舎の五階にあった。教室というよりも講義室といった方が正しいかもしれない。

真ん中に教壇及び黒板があり横に長い机が5列、そこには椅子がそれぞれいくつも配置されている。

教室内の人は計20人くらいだろうか？白いスーツの人と黒いスーツの人の二種類の人っていて、教室のあちこちでグループを作って固まっていたり一人で本を読んだりしている。

ドアを開けて、中に歩いていく夢斗。睦月は入り口でキョリョロとしていた。

「お、夢斗じゃん。あれ？後ろにいるのは・・・誰？」

夢斗に喋りかけたのはドアを開けた正面、講義室後ろの壁の中央あたりにもたれていた青い髪の黒スーツの男。髪型は前髪を残して後ろにもつていき、小さく結んである。（少し怖い・・・。）

「こいつは昨日から俺の部下になった新入りですよ。よろしく頼みますね知春さん。」

「あー、彼が噂の特連部の新入部員？へえー、なるほどねえー・・・。」

不思議な顔をしながら睦月の方をじっと見た後、知春と呼ばれる男は睦月の前に歩いてきた。

噂とはなんの事だろう？と疑問を抱く睦月はガラが悪そうな男を前に、威圧感もあってか少し縮こまるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0763x/>

魂送のサラリーマン

2012年1月8日00時49分発行